

ものと外的なものとの区別において著しい発達を遂げるのは3年生である。(3)思考を心的なものと考え方的なものではないと答えられるようになるのは10・11才頃である。しかし物質性を残しながらも一応思考を頭に定位出来るようになるのは、1年生である。(4)名の場所に関する実験結果はピアジェの結果と大きな差異を示した。彼によると9才頃に名の場所における実在性が消失すると言うが、本実験では10・11才でも半数の者しか名の場所を頭に定位出来なかつた。(5)名の論理的な実在性が消失し、名の記号性を真に理解するようになるのは11才以後であり、これは子どもにとって一番困難なことであつた。(5)名の起源を神に求めようとするものは少数であり、これもピアジェの結果と異なる点である。

(大会発表論文抄録69-71頁)

幼児における指の定位

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西 憲明・布川 延子
森田 潤子・野尻 とし子

目的 指を用いて、種々の遊びを指導することは多く、例えば指の命名、数え方、指を用いて事物を指摘させるなどがある。さらに、指を刺激するとか、特定の運動をさせることによって、その反応の正確水準や運動の巧拙度を通して大脳中枢機制の発達を推定する試みも多くなされている。ここでは、これらの基礎的知見の一端を得ようとした。

方法 四一六才の幼児群に、机の上に両手を、手のひらを上にして置かせ、どれかの指を実験者が刺激し、その刺圧された指と同じ指を、両手を挙げた姿で描かれた指のうちから選択して指示させ

た。この場合、一方の手の中指を、また小指と人さし指を、さらに両手の薬指と人さし指を刺激して再生的に指示させた。

この場合、開眼と閉眼の両条件の下に実施し、さらに手のひらを上にしても、同様な条件で実験を試みた。

以上の結果からは、正確に反応した率からいえば、年齢が進むほど正反応が上昇し、男女の性差は認められない。また刺激数の増加に伴つて正反応が減少するし、手のひらの上下では有意差がない。閉眼よりも開眼の場合に正反応の定位が多いのもいうまでもない。

次にこのようないくつかの再生的に定位させる指の絵の代りに、赤丸の紙を紙の水平線上に並列させ、この系列のうちから同様な条件下で指摘させた場合には、有意に正反応率が低下した。つまり、刺激された指を、再生的に定位づけるにしても、その定位する絵が、手の具体的な絵とはちがつて、抽象的な赤丸系列の配列では、正確にその場所を指摘することがより困難であった。即ち、刺激された特定の指の所在は明らかに意識されても、定位し指摘すべき課題が等質な赤丸の配列では、分化が乏しく、これと対応させることがむずかしい。従つて、再生させる定位图形自体の体制化に依存しているといえる。

結語と考察 指を用いて、このうちのどれかを客観的にその所在を定位して指示する能力は、四一六才の間で著しく発達する。しかし、指示させる対象が、具象的でない場合には、その対象自体の構造の抽象性のために認知・弁別の困難を伴ない、正確さを低下させる。幼稚園で、数の概念を養うために直接的に指を使用させることが、これを間接的になんらかの事物に移調させて、数の概念の発達を計るにしても、その移調させる事物の特質の具体性・親近性、配置のなされたたには、十分の考慮が払わなければならないであろう。